

「生きること，生かされること」概要：公開講演 会報告

著者	坂巻 熙
雑誌名	筑波大学リハビリテーション研究
巻	2
号	1
ページ	43-46
発行年	1993-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/10874

〔公開講演会報告〕

「生きること、生かされること」概要

講師：坂巻 熙 先生

I. ADA署名式でのブッシュ大統領の演説

2年前の7月26日。ホワイトハウスの南側にある、サウスローンという広場において3千人の障害をもった人たちが集まりました。障害をもつアメリカ人国民法(ADA)のブッシュ大統領の署名式のセレモニーが開かれたのです。この法律は一切の差別を禁止した画期的な法律で有名です。そこでブッシュ大統領はこう演説しております。『もう一つの独立記念日を喜び、祝うために集いました。このアメリカ障害者法の成功は、アメリカ独立宣言に、次の言葉を書き込んだ、勇気ある先人達の精神を、忠実に守り続けてきたことを物語っているのです。』それはどんな文章かと言いますと、『我らは、自明の真理として、すべての人は平等につくられ、造物主によって一定の不可譲の権利を付与されていることを信じる。』という独立宣言の中にある言葉で、この言葉は、『より完全な統合の実現を目指す私達を2世紀以上に渡って導いてきたものである。』と、言っているわけです。ADAは、人権というものを高らかにうたいあげ、現在アメリカで障害者がおかれている差別の状況を、法としてなくしていこうという、大変すばらしい理念を掲げているわけで、内容については、いろんな資料がでています。この歴史的なアメリカ障害者法に署名することにより、障害をもつすべての男性・女性・子供が、これまで閉ざされてきた、平等・独立・自由の輝く新時代への扉を通り抜けることができる、この歴史的な法律は、障害をもつ人々の平等に向けた、包括的な宣言として、世界で初めてのものであります。この法律が通過したことにより、米国は人権問題に関する、国際的リーダーとしての道を確立しました。これは、1981年に提唱された国際障害者年の一つの成果であると言えます。ごぞんじの通り、1983年、国連がこの年より10年間を「国際障害者年の10年」と決めました。そして、この10年たった今年は、わが国でも障害問題がどのくらい進んだのかチェックされる年であり、われわれもこの目で実際に見なければならないわけであります。「障害者が“完全参加と平等”という、社会に当たり前に暮らせるようにするために、いろいろな壁がある。ベルリンの壁が崩壊した

今、それと同じように、今、障害者を阻んでいる壁をこの法律は壊したのだ。』と、ブッシュは云っているわけです。

II. 日本において社会及び福祉がどう変わってきたか

日本の社会がどのように変わってきたのか、この10年間の変化をふりかえってみましょう。今は第1次産業、第2次産業が衰退し、第3次産業であるサービス産業が主流であるのが現状です。企業でも栄枯盛衰がありました。中でも一番変わったのは人口構造の変化といえるでしょう。お年寄り、高齢者が増加し、若者はどんどん減少する現象が加速されています。これからどう対処するかは、日本の福祉関係者においても大きなテーマになっています。平均寿命は男76歳、女82歳になり、3大成人病といわれる癌・心臓病・脳卒中がなくなると、人生90年時代もそこまできており、一方、子どもの出生率は1.53人と減少しております。

このようなお年寄り、障害者に対し、これまではまず第1義的には、家族がお世話し、お世話しきれないところを福祉が世話するという福祉政策で対応してきました。しかし、今は家族の形態が変わってきています。1世帯2.9人という小さな家族、お年寄りだけの家族が増えてきているのです。働く女性、高学歴の女性が増え、結婚しない女性、子どもをうまない女性が増えましょうし、産んでも1人か2人となりますと、かつての家族とこれからの家族は全く違った状況になってくるわけです。当然、ものの考え方も社会のあり方も変わってこなければならない。たとえば、年をとれば家族と同居して子供や孫に世話になって生きるのがあたりまえだという考え方は、人生50年時代の発想であります。そんなことは、これからはとてもできない時代になると思います。これからは、高齢化社会は別名「長寿社会」といえます。一人の孫に10人位のおじいちゃん・おばあちゃんがいてもおかしくない社会です。とても大事にするのは無理というものです。つまり、「年をとれば孫や子供に大事にされる」というイメージにギャップが生ずるわけです。また、「孫は目に入れても痛くない。」というイメージも、長寿社会にな

ると40歳の孫がいてもおかしくない、また、一人の孫に5〜6人のおじいちゃん・おばあちゃんがいて、「孫を抱けない時代」がくるわけで、つまり、意識の変革が必要とされているのです。人生50年時代から人生80年時代の福祉へ考え方を変えなければいけません。かつては、まず家族が世話をし、家族でできない面を社会がお世話する時代でした。しかし、これからまず社会が責任をとり、家族は家族でしかできない愛情とか、きめの細かいことをやるというように、福祉のあり方を変えなくてはいけないと思っています。そう考えるきっかけとなったのが、私が障害者とともにアメリカ大陸を横断する機会を得たことです。障害者を保護する人と位置づけるのではなくて、政策決定にも参加することをよびかけた国際障害者年の理念がこれからの福祉のあるべき姿だと私は思う。アメリカでは、最近、「people first」ということばがはやっています。障害者はまず市民なのだ、とのアピールです。アメリカで行われていることすべてが正しいというわけではありませんが、権利・人権あるいは、障害者も当たり前の市民なんだという視点において日本はちょっとかなわないという感じがしたわけです。

III. 日本の福祉の現状

保護する人と保護される人とがはっきり分かれ縦の関係の中に位置づけられているのがこれまでの日本の福祉であります。国際障害者年の時、毎日新聞社の企画で、私はトヨタ自動車につくってもらった車で障害者がアメリカ横断するという旅に行きました。その時のアメリカ人との交流でびっくりしたことがいくつもありました。まず第一に、国際障害者年のとらえ方です。日本では、テレビで国際障害者年の歌が流れ、全国的なキャンペーンが展開されていましたが、アメリカでは、国際障害者年なんて知らない人ばかりだったのです。ところが、障害者があたりまえの市民として地域の中にとけ込んでいるわけです。また、こんな事がありました。アメリカのケネディ空港で白タクに遭うという体験をしたのです。私自身まさか障害者に悪いことをすることがあるはずはない、というイメージをもっていたのです。考えてみるとこれも障害者に対する差別意識の現れであり、善意で車に乗せてくれるものと思い込み、車に乗ってホテルに着いたところ法外な金を出せと脅されました。アメリカでは障害をもっていようがいまいがカモはカモなのだと、逆に感心させられたわけであります。ローカルテレビをみますと画面の一角には手話通訳のコーナーが出ています。

街にはたくさん障害者が歩いています。駐車場には一番便利な所に、ちゃんと車椅子のスペースがあります。あたりまえの市民としての障害者の存在を目にできました。アメリカでは障害者を保護する立場ではない、障害者自身が自立をしようことが目的となっている社会だ、という印象を受けました。障害者用の車はアメリカと日本では違うのです。日本ではできないところをみつめて、いろいろな条件により運転免許を出さないのですが、視野狭窄の人も下半身不随で車椅子にのっている人も運転できる社会、それがアメリカなのです。できるところをみつめてなんとかのばしてあげる社会、できるところをみつける社会なのです。

1. 完全参加と平等とは？

国際障害者年の理念の一つに「完全参加と平等」があります。では、完全参加と平等とは何でしょう？ 仮にことばは悪いですが、こちらに「健常者の社会」があって、こちらに「障害者の社会」があるとしたとすると、リハビリテーション等のこれまでの福祉は、障害者を健常者の社会に入れてあげる社会を意図したものと思います。しかし、そうではなく、2重に重ねる社会が真の福祉だと考えます。かつての福祉は保護と隔離の社会でありました。こうした発想の社会でありました。しかし、共存・共に働ける社会にすべきなのです。

障害者と健常者とははっきり分けられるものなののでしょうか？ 国際障害者年の理念の中に大変素晴らしい理念があります。「障害があるために普通の人と同じような生活ができないから障害者と呼ばれるんだ。」「障害とは固有のものではない、環境との関係で障害者になったりならなかったりする。」という考えです。環境が障害者を生んでしまうという考え方です。ですから環境が悪いということになります。個人と環境の関係において障害が規定されるのです。例えば、私は重度の近眼で、メガネという補装具がなければ視力障害者になるし、外国にいけば私も言語障害者になります。車椅子で自由に移動できる環境があれば、車椅子の人は障害者と呼ばれない、という考え方です。WHOの規定では障害を3つの段階に分けて考えています。一つは「impairment」（欠損）、もう一つは「disability」（能力障害）、そして「handicap」であります。例えば、手・足がない、手が動かないとかは「欠損」であります。それが原因となって結果として本が持てない・読めないとなると「disability」となります。handicapは「社会的不利」、本が持てない、読めないことが原因となって普通の人と同じことができない、入社試験を受けき

せてもらえない、電車に乗れない、となるとこれは社会的不利となります。impairment「欠損」は、なくすことができないものです。disabilityは「能力」障害であり、科学的技術の進歩である程度まではカバーし、援助可能ですが限界はあります。問題は、handicap「社会的不利」なのです。これはなくすことが可能であります。障害者をなくすのではなく障害があるがために社会的な不利を受けている、この「社会的不利」をなくすことが目的となってくるわけです。

2. どうすればよいのか？

では、どうしたらこの「社会的不利」をなくすのか？国連の障害者年の事務局次長のエスコ・コスーネン氏は、障害者が普通の人と同じようにこの社会でくらすべくには「3つの壁」があるといわれました。それは、1) 物理的壁、2) 制度の壁、そして3) 心理的な壁であります。車椅子にとって階段は物理的な壁になり、受験を認めない制度は制度の壁で、障害者と我々は違う、かわいそうという意識もある意味で心理的な壁といえるでしょう。

これまでの福祉は、「お世話しなくてははいけない。」との理念であったと思います。これが心理的な壁を助長してきたのではないかと考えます。精薄施設を作ろうとしても反対運動がおきます。調布市で問題になっている精神障害者の共同作業所建設の反対運動もその例です。心理的壁である障害者の差別を生み出す偏見は、障害者をわれわれと関係のない人達だ、として、山の上に人里離れて住めばいいという意識がまだあるのです。

カリフォルニア州のリハビリテーション局長であったエド・ロバーツ氏は重度のポリオですが、こう語っていました。「体は不自由だが、頭は人並以上だ。外見で判断してもらっちゃ困る。不自由だが不幸ではない。」ここにアメリカの障害者のたくましさがあると思います。

3. 無知の問題

かつて総理府が企画した「青年の船」というものがありました。私は当然障害者も参加できると思ったのですが、総理府は障害者は船の中で生活できないという理由で、障害者の参加を断りました。そこで私は障害者を締め出す国際障害者年の青年の船なんて意味がない、というような記事を書きました。反響は半々でした。船の中で事故があったら責任はどうするのか、遠慮するのがあたりまえだ、障害者がいることは日本の恥だ、という反応までありびっくりしました。

アメリカと日本で一番違うと思うところは何かとア

メリカと一緒に旅した車椅子の理学療法士に聞くと、「人がオレをみる目線が違う。アメリカでは目線を顔に感じた。しかし日本では目線を背中に感じるんだ。」と云われ、なるほどなと思いました。

「無知」ということが最大の問題であると考えます。障害者を誤解する、→誤解が偏見を生み→差別になる。知らないことから全てが始まるのです。人の好意を素直に受けてもらえないと不愉快になりますが、こんな例があります。目の見えない人に手を貸そうとしたら断わられたということです。「なぜ断わられたか」が問題になりました。ツエをもった手を引っ張ったのではないか、エスコートの仕方が悪かったのではないか、と思います。車椅子もそうです。どうエスコートしていいかわからないのではないのでしょうか。コツがあるのです。ボケ老人の世話をしているお姉さんに、一番辛いことは何ですかと聞きました。近所の人の目なのです。冷たく批判的な目でみるのです。勝手に出歩くため、背中に住所、氏名を書いた「背番号」を縫いつけたのです。その背番号をはったことの批判の目なのです。背番号をつける必要のない社会が大切です。回りのコミュニティが悪いのです。見かけた人が連れて帰る社会ではないのです。

住み慣れたところで住める社会を創っていかなくてはなりません。それが地域福祉であります。施設を創る必要もあり、施設に入りたい人は入れ、入りたくない人は入らないですむようにしなければなりません。今までのような一方的に措置される福祉ではなく、主体的な選択ができることが大切なのです。

IV. これからの福祉とは

俳優の宮城まり子さんに「福祉とは何か？」と聞いたことがあります。彼女が何と答えたかというところ「巡礼宿の心。」だと答えました。四国では、巡礼さんのお寺参りで、宿屋のないところで日が暮れると、普通の家が宿を貸すことを、巡礼宿といいます。巡礼宿とは、困っている人がいるから助けるのではなく、巡礼者を泊めることに巧徳がある。数ある家の中でよくわが家に泊まってくれた、泊めてくれてありがとう、泊まってくれてありがとうという横の関係が大切で、これが福祉だ、というのです。人を助けているように見えて助けられている面もあります。おばあちゃん介護のボランティアは「おばあちゃんにやさしさをいただいている。おばあちゃんがにっこり笑ってくるとそれで私自身やさしくなるのです。」→子どもにやさしくなる。点字ボランティアをしている人：若いときは役に

立ちたいと思って点字ボランティアを始めました。もう70歳になって点訳を取られたら何もすることができない。点訳を読んでくれる人がいるから私は点訳ができて生き生きと生きられるのです。いつか自分にふりかえて豊かになる、そういう社会が理想の福祉である、「してあげる—してもらう」の関係でなくなることがあるのです。どちらもお互いにボランティアをしているという横の関係にみえることがあるのです。

「一言声をかければもっとスムーズになるのに。人間関係はもっとよくなる。」ことがあります。都市は人を自由にします。逆にそれが孤独につながっていきます。強い時はいいが、いつかは誰かに依存する時がくるのです。遠い親戚より近くの他人という言葉がありますが、最近の過密化した都会では、近くの他人より遠くの他人と、私は云っているんです。隣同士の間関係がこわれて、お互い住みやすくするための話し合いができなくなっている現象がよくみられます。「人に迷惑はかけないが、人にも迷惑をかけられたくない。俺はおれでほっといてくれ。」というミーイズムという言葉があります。私も「人に迷惑をかけないことは良いこと。」と教育を受け育てられてきました。ですが「人に迷惑をかけなくては生きていけない人はたくさんいる」人間の存在自体迷惑をかけるもの、人の迷惑を喜びに感じるように、人の迷惑を喜びに変えていける社会にする必要性を私は脳性麻痺の人に教えてもらいました。迷惑をかけてくれる人の存在が大切になってくる。「障害者専用トイレ」は社会から隔離することになります。街の仕組みから障害者・老人に合わせた社会、それは我々にとっても住みよい社会です。我々もいつかは年をとってきます。専用トイレはやめ、「専用」の思想は廃止すべきです。障害者も老人もみんなが使えるものにすべきです。

自立というのは、「自分で生きたい生き方を自分で選択できること」とするならば、老人でも障害者でもあてはまることといえます。古切手を1日に1枚〜2枚しかはがせなくてもこれも自立というべきです。障害者ができることはやらなければならない。我々社会の側もできることをしていかなければならない。かつての障害者の世界を健常者のそれに近づけていくのではなく、健常者の世界を障害者の世界に近づけていくのです。障害者がスーパーマン的努力を必要とするのではなく、社会の側も変えていく、近づけていく必要があるのでは、と思います。共同作業所がどんどんできています。一生懸命働いて月に1万円位だが「働きたい」という思いが強いのです。

これからの福祉には3つの柱が必要と考えます。すなわち、「自助」、「互助」、そして「扶助」の3つです。自助とは自らできること。互助とはお互いに助けあうこと、これについては我々ができることをやらなければいけないことであります。そして扶助、それをやるためには社会的制度が確立しなければなりません。障害者も老人も同じ立場にたって家庭、社会で実践して欲しい、自分に何ができるのかを考えていただきたい。

「もしあなたが障害者の人権を否定したのなら、あなたはあなた自身の人間性を否定したことになります。」

アメリカを旅したとき、ネブラスカ州の州都リンカーンの自立生活センターで見かけた言葉です。

障害者問題に私たちが関わることは、私たちの人間性を問われていることなのです。

(文責、編集部)

これは1992年10月31日の公開講座での講演を編集部でまとめたものです。